

## 南木睦彦\*：縄文時代以降のクリ (*Castanea crenata* SIEB. et ZUCC.) 果実の大型化

Mutsuhiko MINAKI\* : Enlargement of the fruit size of *Castanea crenata* SIEB. et ZUCC. since the Jomon Period (since ca. 10000 yBP) in Japan

**要旨** 日本の縄文時代以降の14遺跡から産出する未炭化のクリ (*Castanea crenata*) の果実の大きさを調べた。縄文時代早期 (約9300 yBP) のものは現在の野生のものと同様の大きさである。縄文時代前期から中期 (約6000~4000 yBP) にかけて大きくなる。縄文時代後期から晩期 (約4000~2250 yBP) にかけて、野生の倍ほどの大きさとなり、現在の栽培品種に匹敵するものが現われる。

**キーワード**：大型植物化石、クリ、縄文時代

**Abstract** Uncarbonized fruits of *Castanea crenata* were collected from 14 archaeological sites since ca. 10000 yBP, in Japan. In the Earliest Jomon Period (ca. 9300 yBP), the fruit size was similar to the wild ones. During Early to Middle Jomon Period, (ca. 6000 to 4000 yBP), their size became larger. In the Late to Latest Jomon Period (ca. 4000 to 2250 yBP), some of them are twice larger than the wild ones, and reach the size of the modern cultivated forms.

**Key Words** : *Castanea crenata*, Jomon Period, Plant macrofossils

### 1. はじめに

クリ属は約12種が北半球の温帯に分布し、各地で食用にされている。日本には固有種、クリ (*Castanea crenata* SIEB. et ZUCC.) が分布している。縄文時代以降の、主として東日本の各地の遺跡からクリ果実が産出しており、トチノキ種子やコナラ属果実などとともに、主要な植物性食糧であったことが分かっている (渡辺, 1975)。

中尾 (1974) は、縄文時代中期に野生のクリとは明らかに異なる大型のクリ果実があり、半栽培の段階のものであったと判断してよいであろうとした。一方、渡辺 (1982) は、縄文時代のクリ遺体には、ほとんど大形品は見当らず、トチノキの誤認の可能性もあるので、試料の再検討が強く望まれるとした。粉川 (1983) も同様の立場を取り、一般に縄文遺跡から出土するものは小型で、子葉の幅・高さとも20 mmに満たないものが多いとした。ただし、粉川が検討したものは未炭化果実はわずかで、多くは炭化した子葉であった。

このように1980年代前半には、縄文時代のクリ果実に本当に大型のものがあるかどうか疑問視されるにいった。その後、各地から計測値を伴う報告や、写真を明示した報告が増えてきた。ここでは、これまでに報告された縄文時代早期以降の各地の遺跡から産出したクリ果実の計測値を集成して、果実の大きさの変化を論じる。

### 2. 試料と産状

クリ果実は、炭化した子葉が産出する場合と、炭化していない果実が産出する場合がある。これらのうち、今回は炭化していない果実を中心に扱う。というのは、炭化していない果実の大きさを現生種の果実と比較することは容易であるが、炭化子葉の場合には、収縮率を見積らなければならないなど、単純な比較が困難であるからである。

クリの幼果や殻斗が産出した例は、私の知る限りない。殻斗の刺針が産出した遺跡は、埼玉県伊奈氏屋

\*〒651-21 神戸市西区学園西町3-1 流通科学大学

University of Marketing and Distribution Sciences, Nishi-ku, Kobe 651-21, Japan.

敷跡遺跡(南木, 1984)と粟津湖底遺跡(辻ほか, 1992)のみであり, いずれも少ししか産出していない。

資料を得た遺跡を Table 1 に示した。また地点を Fig. 1 に示す。各資料の地点の詳細は次のとおり。

資料1(辻ほか, 1992) 粟津湖底遺跡は滋賀県大津市春嵐町地先にある。縄文時代早期の遺物包含層からは, クリ果皮が多産しており, 1000 cm<sup>3</sup> あたり概数として 20~30 個分が含まれている。木本ではオニグルミやカシワなどが産出している。ヒシヤコバナヒルムシロといった水草も産出するので, ヒトが投棄したものが水域で堆積したものであることがわかる。9300~9400 yBP の放射性炭素年代値が得られている。

資料2(西田, 1979; 福井県教育委員会, 1987) 鳥浜貝塚は福井県三方郡三方町鳥浜字高瀬にある。縄文時代早期から前期にかけての植物性遺物を含む, 多様な遺物が産出している。縄文時代前期からヒョウタンやエゴマ類が産出することでも有名である。スダジイ, コナラ属アカガシ亜属, オニグルミなどと共にクリが産出している。ほとんどがこわされた状態で産出している(西田, 1979)。写真から大きさがわかるものを選んで計測した。

資料3(前川, 1952) 加茂遺跡は千葉県安房郡丸山町にあり, 縄文時代前期の泥炭層遺跡で, オニグルミが多く, カヤ, イヌガヤ, ツブラジイなどが産出している。クリについては, 果皮だけが出ており, 内1個は長さ 30 mm, 幅 40 mm 程の大きさに復元できるものと記述されている。

資料4, 5(辻ほか, 1986) 多摩ニュータウン No. 796 遺跡は東京都八王子市堀之内にあり, 植物遺体を多産する地層がある。Va 層は縄文時代前期から中期, Vc 層は縄文時代中期の地層であるとされた。いずれからもイヌシデ, コナラ, イタヤカエデ, トチノキなどの落葉広葉樹を主とする化石群が得られた。Va 層から3点, Vc 層から1点のクリ果実が産出しており, 計測値も示されている。

資料6(邑田, 1982) 寿能泥炭層遺跡は埼玉県大宮市寿能町にあり, 縄文時代早期から平安時代にわたる複合遺跡で, 各時代の堆積物から多数の植物が産出している。クリは縄文時代中期と後期から産出しており, 後期の2点については写真から大きさを計測できた。縄文時代後期からはオニグルミ, トチノキ, ヒシなどが産出している。

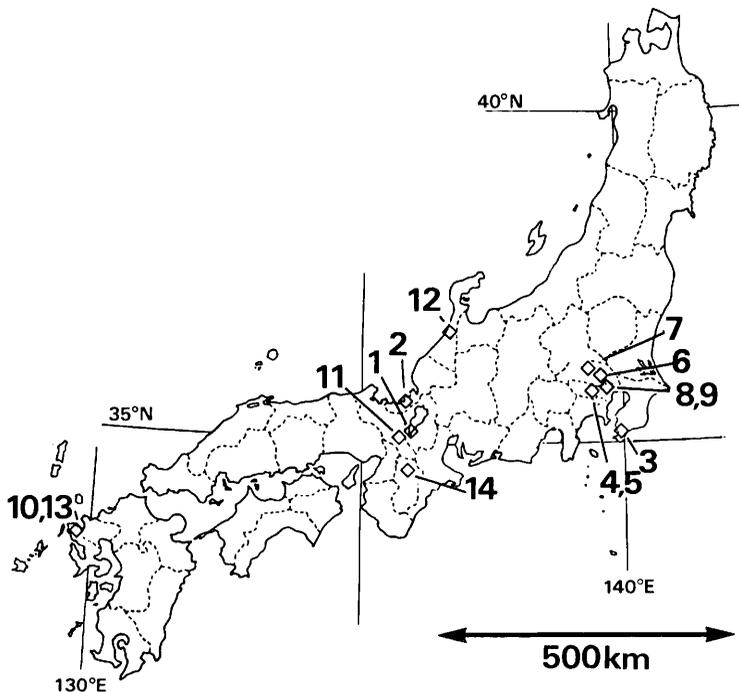


Fig. 1 Localities of the fossil fruits of *Castanea crenata* in this study. Further information of the localities are in table 1

資料7(南木, 1984) 伊奈氏屋敷跡遺跡は埼玉県北足立郡伊那町にあり, 縄文時代後期から晩期の堆積物から, 多数の植物遺体が産出した。ヒシ属の数種, ヒルムシロ属などの水草が多く, コナラやクヌギ近似種を主とし, オニグルミ, イヌシデなど多様な落葉広葉樹を含んでいる。クリは少なく, 計測できたものは1点であるが, 他の破片も大きい。

資料8, 9(吉川・南木, 1988) 袋低地遺跡は東京都北区赤羽北にあり, 縄文時代前期以降の様々な時代の堆積物から, 多数の植物化石が産出した。この内, Co層(縄文時代前期から後期)とE層(縄文時代後期から晩期)からクリ果実が産出した。いずれの層位もアサダ, ハンノキ, イヌシデ, ケヤキなどの落葉広葉樹を多産している。計測できたものは3点である。

資料10, 13(渡辺・粉川, 1982; 粉川, 1983) 菜畑遺跡は佐賀県唐津市菜畑字松円寺にあり, 縄文・弥生時代の稲作遺跡として有名である。大型植物化石はイチイガシを含むコナラ属アカガシ亜属, ツブラジイ, クスノキ, ヤマモモなどの照葉樹林の要素が多い。クリは縄文時代晩期から弥生時代にかけて産出している(資料13)。渡辺・粉川(1982)は弥生時代中期のものを写真に示しており, これから計測した。また粉川(1983)は, 縄文時代晩期の資料には, 30×35 mmもある大型のものがあり, 注目されたと記述している(資料10)。

資料11(南木ほか, 1985) 北白川追分町遺跡は京都市左京区北白川追分町にある。これは京都大学北部構内BG31区発掘時の報告である。縄文時代中期から晩期の堆積物から多様な植物が産出している。クリは縄文時代晩期最終末の堆積物から産出したが, この層位からはアカガシ近似種, ムクノキ, トチノキ, イタヤカエデなど常緑広葉樹と落葉広葉樹が混交して産出している。クリはクリ近似種として報告され, 写真が示されている。

資料12(南木, 1989) 米泉遺跡は石川県金沢市米泉にある。縄文時代後・晩期の集落跡を中心とする遺跡で, 遺跡内を流れる流路内の縄文時代晩期の層位から, クリ果実とトチノキ種子が大半を占める堆積物が見られ, 人為的投棄によってできたクリ・トチノキ塚と判断された。計算すると堆積物1000 cm<sup>3</sup>中にクリは150個, トチノキが141個分が含まれており, 15cmの厚さで約5mの範囲に堆積していたクリ・トチノキ塚には, それぞれ約26万個と24万個分が含まれていたと計算された。17個が計測されており, 写真は3点示されているが, 今回は新たな資料も加え24個分を計測した。

資料14(埋蔵文化財天理教調査団, 1982) 布留遺跡は奈良県天理市布留町を中心に複数の町村にわたって分布しており, 古墳時代を中心とする縄文時代から近世までの複合遺跡である。三島町字里中の発掘区からは多量のモモ核を初めとする種実が産出し, ヒョウタン類, ウリ類, イネ, ウメ, スモモ, モモ, オニグルミ, クリについては計測値を添えて報告されている。クリは古墳時代の堆積物から産出しており, 破片は少なく, ほとんどが完形品である。産状の写真も示されており, 他の植物遺体を含まず, クリのみが集中して産出している。

以上のうち資料14は, 産状から判断すると, ヒトが貯蔵するなどしていたものが, そのまま埋没して産出した可能性がある。資料12はヒトが食用のために果皮を剥いて投棄したものが, その後あまり移動することなく埋積したものと考えられる。資料1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 13は, いずれも自然植生から由来したと考えられる種実が多産し, それに混じってクリが産出した。クリは, ほとんどの地点で果皮だけが産出し, 幼果, 雄花序, 殻斗などの他の部位が産出ししない。また, いずれもヒトが破損したと考えられる状態で産出し, 完形のものとは産出ししない。さらにはいずれの地点でも多かれ少なかれ考古遺物を伴う。これらの理由から, 人為的に投棄したクリ果皮が, 水流などによって移動して堆積した可能性が高いと考えられる。

産出したものはいずれも, ヒトが皮を剥ぐなどしたものであるから, 完形のものはいくつか少ない。2/3程度以上が保存されているものについて, 左右対象であると推定するなどして, 完全な形を推定して計測した。資料1, 4, 5, 7, 8, 10, 11は私自身の採集によるもので, ノギスで直接計測した。資料2, 6, 9は論文に掲載された写真から計測した。資料12は論文中に記述された計測値を用いた。資料3は論文中の記述を採用した。

現生種は, 殻斗の中の複数の果実のうち, 種子が充実して食用となるもののみを計測した。資料15は神戸市六甲山又が谷から森林植物園, 標高460 m, 南木睦彦採集, 1992.10.18。資料16は岡山県蒜山, 矢

野一郎採集，粉川昭平所有，1963.10。資料17は神戸市西区榎谷，標高200m栽培，南木睦彦採集，1992.10.12。

### 3. 結果および議論

クリ属は中国に3種が分布しており，この内シナグリ *Castanea mollissima* BLUME は広く栽培され，日本にも「天津甘栗」として輸入されている。この果実は殻斗への着点が果実に占める割合が小さく，日本のクリとは明瞭に区別される。遺跡から産出した果実にはシナグリと見なせるものはなかった。遺跡から産出したものは，いずれも日本のクリ *Castanea crenata* SIEB. et ZUCC. と同定しうるものであった。

Fig. 2 から Fig. 19 に遺跡から産出したクリ果実を，Figs. 20, 21 に現生の栽培クリ果実を，Figs. 22, 23 に現生の野生クリ果実を示す。Table 1 と Fig. 24 に計測値を示す。北白川追分町遺跡の縄文時代晩期の資料11 (Fig. 13) は，現生野生の資料15 (Figs. 22, 23) と16の中間にあり，野生のものが産出したと考えてよい。他の資料は，現生の栽培のもの（資料17, Figs. 20, 21）と近い大きさを持つもの（資料3；資料7, Figs. 8-10；資料8, Fig. 11；資料10；資料12, Figs. 2-7），野生のものに近い大きさを持つもの（資料1, Figs. 14-19），その中間的な大きさを持つもの（資料2；資料4, Fig. 12；資料5；資料6；資料9；資料13；資料14）など，様々である。

縄文時代早期の資料1 (Figs. 14-19) と，現生の野生の資料15 (Figs. 22, 23)，資料16の幅×長さの平均値に，統計的な差異があるかどうかをt-検定により確かめた。資料1と資料15，資料1と16はいずれも有意水準を0.01にとれば同一母集団に由来する可能性があり，有意水準0.05をとれば母集団が異なることになる。一方，資料15と16は有意水準を0.05にとっても同一母集団に由来することになる。縄文時代早期の資料1については，現生の野生のものよりやや大きいようにも思えるが，現生，化石共に資料が少ないので，確かに大きなものがあったとは言えない。さらに資料の増加が期待される。

縄文時代前期の資料2は，写真から測定したものであるとは言え，少なくとも現生の野生のものより大きい，現在の栽培品種と比べるとかなり小さい。資料3は現在の栽培品種に匹敵する大きさである。縄文時代前期に現在の野生品種よりも大きいものがあったのは確かだが，どの程度の大きさがふつうであったかを考えるには，さらに資料の増加が待たれる。

縄文時代中期の資料5は現在の野生品種と栽培品種の中間的な大きさを持っている。また縄文時代前期から中期の資料4 (Fig. 12) も，同様に中間的な大きさを持つ。

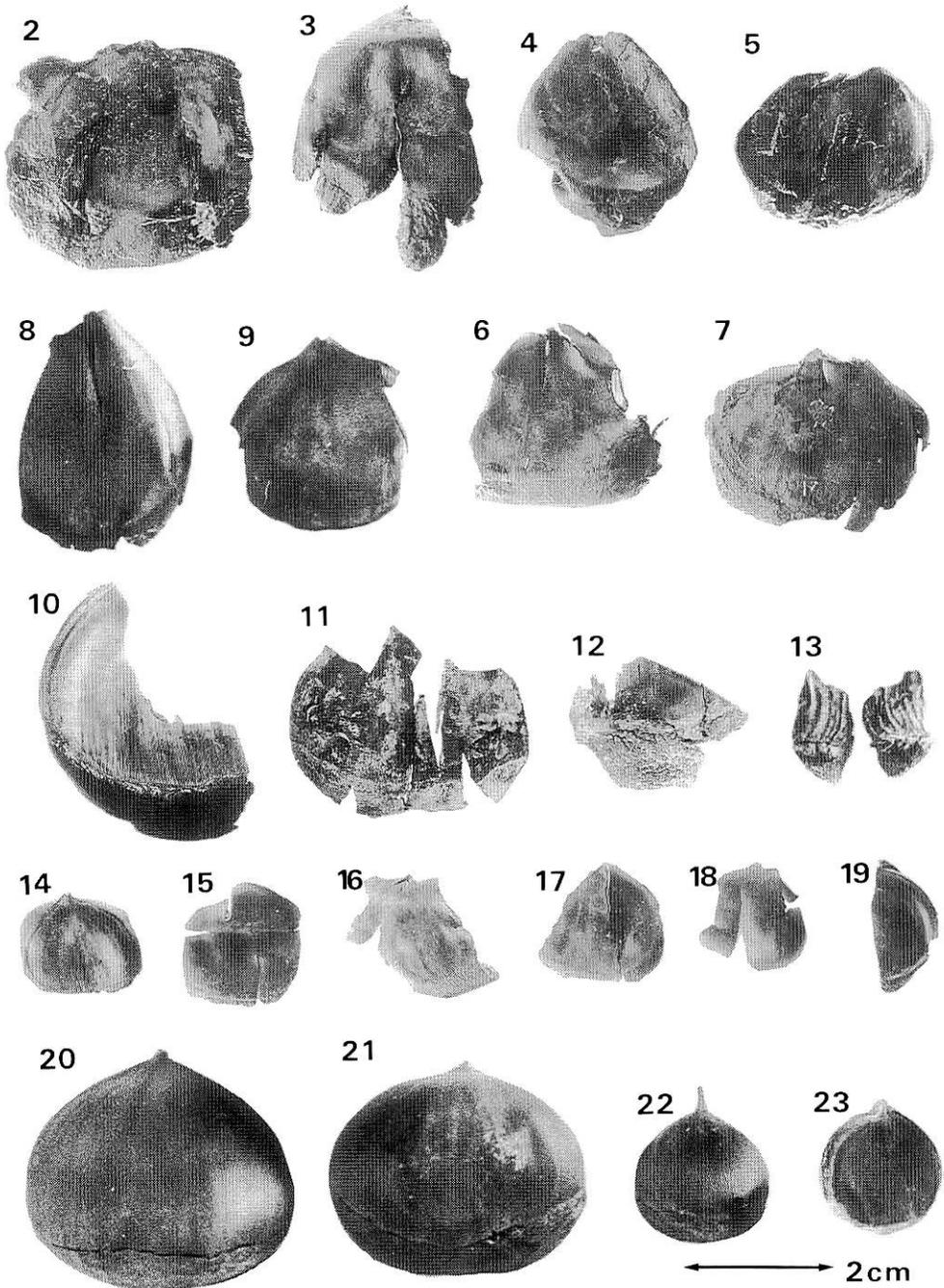
縄文時代後期，晩期になると，現在の野生品種と栽培品種の中間的な大きさのもの（資料6, 9, 13, 14）から，現在の栽培品種に匹敵する大きさのもの（資料7, Figs. 8-10；資料10；資料12, Figs. 2-7）まで様々なものがみられる。現在の栽培品種に匹敵する大きさのものは，縄文時代前期の資料3を除くと，縄文時代後期になって初めて現われる。

以上の他に那須 (1983) は，大阪市平野区長原遺跡の大溝（縄文晩期～弥生）の底や，静岡県清水市天王寺遺跡の貯蔵穴（縄文晩期）から，現在栽培されているものと同様の大きさのものが見られたと報告している。

粉川 (1983) はクリの炭化子葉について，一般に遺跡から出土するものは小型で，子葉の幅・長さとも20mmに満たないものが多いとし，大型のものが産出するかどうか疑問を呈した。しかし，炭化していない果実より，その中身の子葉が炭化したものが小さいのは当然である。どの程度縮むかは不明であるが，縄文時代中期以降の炭化子葉が，現生の野生果実とおおむね同じ程度の大きさなので，少なくとも野生のものよりは大きかったと考えられる。

南木 (1992) は，縄文時代後期や晩期からは，現在の栽培種と変わらない大きなクリ堅果が産出していることが確実であるが，それ以前の時期については証拠が不十分であるとした。しかし，ここで示したように縄文時代前期や中期にも野生のものより大きなクリ堅果が存在したことは明らかである。

今回の資料や従来報告をまとめると，次のようになる。縄文時代早期には現在の野生種と同様の大きさのものを利用していた。縄文時代前期には野生種に比べるといくぶん大きいものが見られるようになり，縄文時代中期には，さらに大きなものが見られるようになった。縄文時代後期，晩期には現在の栽培品種と同様の大きさのものが現われた。



Figs. 2-7 Fossil fruits of *Castanea crenata* from Yoneizumi Site, Latest Jomon (Loc. 12 in table 1)  
 Figs. 8-10 Fossil fruits of *Castanea crenata* from Inashi-yashikiato Site, Late Jomon (Loc. 7 in table 1)  
 Fig. 11 Fossil fruit of *Castanea crenata* from Fukuro-teichi Site, Early to Late Jomon (Loc. 8 in table 1)  
 Fig. 12 Fossil fruit of *Castanea crenata* from Tama 796 Site, Early to Middle Jomon (Loc. 4 in table 1)  
 Fig. 13 Fossil fruit of *Castanea crenata* from Kitashirakawa-oiwakecho Site, Latest Jomon (Loc. 11 in table 1)  
 Figs. 14-19 Fossil fruits of *Castanea crenata* from Awazu-kotei Site (Loc. 1 in table 1)  
 Figs. 20, 21 Modern fruits of cultivated *Castanea crenata* (Loc. 17 in table 1)  
 Figs. 22, 23 Modern fruits of wild *Castanea crenata* (Loc. 15 in table 1)

**Table 1** Measurement of fruits of *Castanea crenata* from the archaeological sites and the modern one. Each site has their mean values. Standard deviations are attached after “+—” marks. Minimum and maximum values are shown in the parentheses. When there are less than three specimens, standard deviations have not calculated. Detailed information of the sites are shown in the text. According to Keally and Muto (1982), the archaeological age is comparable to the radio carbon age as follows. Earliest Jomon is from 9500 to 6100 yBP, Early Jomon is from 6000 to 4600 yBP, Middle Jomon is from 4600 to 4000 yBP, Late Jomon is from 4000 to 3250 yBP, and the Latest Jomon is from 3250 to 2250 yBP in the Kanto District. There are a little deviation of the radio carbon age according to the district. Yayoi and Kofun are the following archaeological period after Jomon.

Locality number	Prefecture and the site	Age	Length (mm)	Width (mm)	Length by width	Number of specimens
1	Siga Awazu-kotei	Earliest Jomon	16.9+2.2 (12.8-20.0)	18.9+2.0 (15.8-23.0)	320+62 (202-398)	8
2	Fuku Torihama	Early Jomon	20.6+2.6 (16-25)	23.6+2.7 (20-29)	492+111 (320-725)	17
3	Chiba Kamo	Early Jomon	30	40	1200	1
4	Tokyo Tama796	(Early) to Middle Jomon	25.5 (22.0-31.0)	27.6 (22.5-32.0)	715 (531-992)	3
5	Tokyo Tama796	Middle Jomon	19.8	27.7	548	1
6	Saitama Juno	Late Jomon	25.2-28.2	20.2-30.8	509-869	2
7	Saitama Inashi-yashikiato	Late Jomon	38.0	44.0	1672	1
8	Tokyo Fukuro-teichi	Early to Late Jomon	26.6-33.3	32.2-35.0	856-1166	2
9	Tokyo Fukuro-teichi	Late to Latest Jomon	22.0	25.0	550	1
10	Saga Nabatake	Latest Jomon	30.0	35.0	1050	1
11	Kyoto Kitashirakawa-oiwakecho	Latest Jomon	14.3	15.0	214	1
12	Ishikawa Yoneizumi	Latest Jomon	30.2+2.7 (25.2-35.2)	32.4+3.1 (26.6-40.7)	985+164 (706-1253)	23
13	Saga Nabatake	Middle Yayoi	26.6	30.0	798	1
14	Nara Furu	Kofun	27.8+2.3 (22.7-30.8)	30.1+4.1 (24.7-39.9)	845+168 (590-1225)	18
15	Hyogo Mt. Rokko	Modern, wild	14.4+1.2 (12.4-16.3)	16.4+1.3 (13.8-18.3)	237+37 (171-298)	7
16	Okayama Mt. Hirusen	Modern, wild	15.7+2.1 (13.1-18.4)	14.2+1.2 (12.2-15.7)	225+43 (173-278)	6
17	Hyogo Kobe-shi, Nishi-ku	Modern, cultivated	32.9+2.7 (28.9-37.4)	38.4+3.3 (31.2-42.3)	1269+204 (939-1582)	11

今回扱った資料は、そのほとんどが、人が投棄するなどして堆積したものである。従って、この大きさの変化は、人が食用にしたクリの果実の大きさの変化を示していることになる。植生中のクリ全ての果実の大きさが、このように変化したことを示しているわけではない。

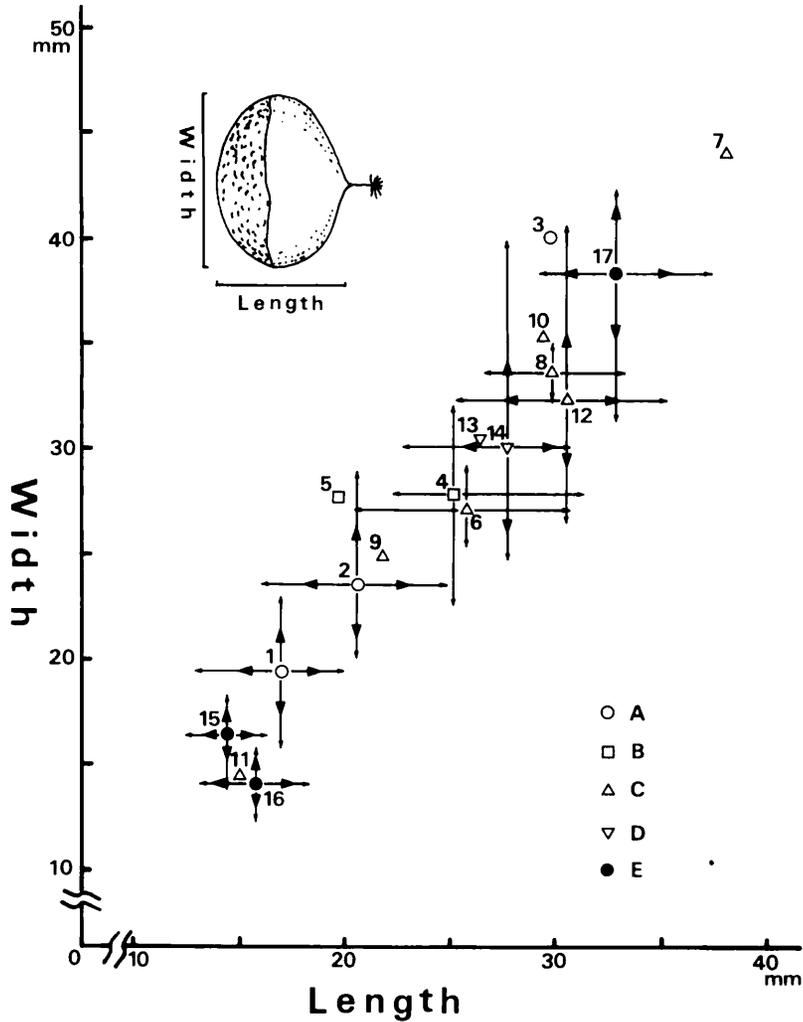


Fig. 24 Size variation of *Castanea crenata* fruits in fossil and modern specimens. Symbols "A" to "E" are placed on their mean value. Each symbol show its age. A: Earliest to Early Jomon. B: Middle Jomon. C: Late to Latest Jomon. D: Yayoi and Kofun. E: Modern. Each numeral which is attached to the symbol shows its site number corresponding to table 1. Large arrows from the symbols show their standard deviations, and small arrows show their range.

引用文献

福井県教育委員会. 1987. 鳥浜貝塚—1980~1985年度調査のまとめ. 136 pp, 367 図版. 福井県教育委員会.  
 キーリ, C. T.・武藤康弘. 1982. 縄文時代の年代. 「縄文文化の研究 1 縄文人とその環境」, 246-275. 雄山閣.  
 粉川昭平. 1983. 縄文人の主な植物食糧. 「縄文文化の研究 2 生業」, 42-49. 雄山閣.  
 前川文夫. 1952. 加茂遺跡から出た小形の植物性遺物について. 「加茂遺跡」, 125-130. 東京都.  
 埋蔵文化財天理教調査団. 1982. 出土果実および種子の同定 I (考古学調査研究中間報告 4), 47 pp, 8 図版.  
 埋蔵文化財天理教調査団.  
 南木睦彦. 1984. 伊奈氏屋敷跡遺跡出土の大型植物遺体. 「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書—II

- 赤羽・伊奈氏屋敷跡, 203-212, 図版 58-63, 附表 1. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団.
- . 1989. 米泉遺跡の大型植物化石. 「金沢市米泉遺跡」, 279-296. 石川県埋蔵文化財センター.
- . 1992. 低湿地遺跡の種実. 考古学ジャーナル, 355: 18-22.
- . 山尾正之・粉川昭平. 1985. 北白川追分町遺跡出土の種実類. 「京都大学埋蔵文化財調査報告 III 一北白川追分町縄文遺跡の調査」, 113-138, 図版 22-33. 京都大学埋蔵文化財センター.
- 邑田 仁. 1982. 種子. 「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—自然遺物編—」, 287-298, 図版 44-47. 埼玉県教育委員会.
- 中尾佐助. 1974. 半栽培という段階. 自然, 29 (2): 20-21.
- 那須孝梯. 1983. 縄文時代のクリ. Nature Study, 29 (10): 2-6.
- 西田正規. 1979. 植物遺体. 「鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 1—」, 158-161, 図版 98-100. 福井県教育委員会.
- 辻 誠一郎・南木睦彦・鈴木三男・能城修一・千野裕道. 1986. 多摩ニュータウン No. 796 遺跡; 縄文時代泥炭層の層序と植物遺体群集. 「多摩ニュータウン遺跡—昭和 59 年度第 3 分冊, 東京都埋蔵文化財センター調査報告第 7 集」, 72-116, 図版 35-64. 東京都埋蔵文化財センター.
- . 中村俊夫・南木睦彦・植田弥生・小杉正人. 1992. 粟津湖底遺跡の縄文時代早期の植物化石群と放射性炭素年代. 「粟津湖底遺跡」, 56-61. 滋賀県教育委員会.
- 渡辺 誠. 1975. 縄文時代の植物食. 247 pp. 雄山閣.
- . 1982. 縄文時代人の食生活. 「季刊考古学 1」, 14-17. 雄山閣.
- . 粉川昭平. 1982. 菜畑遺跡の大型植物化石. 「菜畑, 唐津市文化財調査報告第 5 集」, 467-473. 唐津市教育委員会.
- 吉川純子・南木睦彦. 1988. 袋低地遺跡の大型植物遺体. 「袋低地遺跡—自然科学編 1—」, 367-403. 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会.

(1993 年 8 月 12 日受付, 1993 年 11 月 6 日受理)

書評 (新刊紹介): 吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会 (編). 1993. 吉崎昌一先生還暦記念論集. 先史学と関連科学. 318 pp. 吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会.

吉崎昌一氏の略歴, 著作目録, 門下生ならびに同学の士の 22 編の論文が修められている。著作目録からは北海道ならびに東北地方での最近の活発な栽培植物研究がうかがえる。論文は第 1 部先史学と第 2 部関連科学に分けられており, 後者には次の論文が含まれている。縄文時代の墓に副葬されたキク科植物, 山田悟郎, 墳墓中の花粉組成からの花の副葬を推定した. Correlation of foxtail and broomcorn millet remains in House 1 at the Kashiwagigawa 11 Site, Hokkaido, Gary W. CRAWFORD, グリッドごとの分析から, キビとアワが混合して貯蔵された可能性を考えた。アワ・ヒエ・キビの同定, 椿坂恭代, SEM や灰像法も用いた同定基準ならびに応用例。以上の他に, 安定同位体による食性分析に関する論文も 2 編含まれている。購入希望の方は同刊行会 (〒 060 札幌市北区北 11 条西 7 丁目, 北海道大学埋蔵文化財調査室 気付) まで連絡のこと。

(南木 睦彦)